

熊本学園大学 機関リポジトリ

ディスエンパワメントからの回復に関する研究： シカゴ市ローガンスクエアの移民女性のエンパワメント・プロセスから

著者	仁科 伸子
雑誌名	社会福祉研究所報
号	47
ページ	1-22
発行年	2019-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1113/00003207/

ディスエンパワメントからの回復に関する研究

～シカゴ市ローガンスクエアの移民女性の エンパワメント・プロセスから～

仁 科 伸 子

要 約

シカゴ市ローガンスクエアのコミュニティ・オーガニゼーションであるローガンスクエア・ネイバーフッド・アソシエーションは、50年以上地域組織化活動を行ってきた。この中で25年前に始めたペアレントメンター・プロジェクトによる移民女性の小学校での学習サポート活動に着目し、この活動に参加した後、社会的、経済的エンパワメントを獲得していると考えられる女性たちにインタビューを行って、ディスエンパワメントから、エンパワメントにいたるまでのプロセスの中で、影響を与えている活動の内容や介入の方法について研究した。

この結果、まず、移民が出身国で培った社会的地位や教育が、アメリカ社会においてその価値を認められず、底辺労働に従事する生活の中でディスエンパワメントが進むこと、及び、10代の妊娠、出産による高校の集団からの離脱によるディスエンパワメントが起こっていることが明らかになった。

エンパワメントは、対象となる人々の位置する文化的、経済的、社会的背景によって到達目標やアプローチは異なる。ここでは、主にアメリカの中西部の大都市シカゴにおけるラテン系移民女性のエンパワメントについて取り上げた。

ディスエンパワメントからエンパワメントに移行するためには、3つの重要な鍵がある。エンパワメントは、外国語としての英語を習得するリテラシーと自分自身の考えや自分のおかれている状況を対話によって共有するオラリティに立脚したグループワークによって進展することが明らかになった。2つ目に、権力への接近と政治への参加が、社会の一員としての自らの重要性を再認識させ自己肯定感を高める。また、「あなたの夢は何ですか？」というコミュニティ・オーガナイザーの問いかけが、妻や母となって、自己を失っていた女性に対して、「自己」を再発見するための扉を開く重要な鍵となっていた。

1. 本研究の目的と背景

1.1 本研究の目的

エンパワメントは、ジョン・フリードマンやソロモンの定義にあるように、力を剥奪された状態、あるいは、力（権力の基盤）へのアクセス機会がない状態に対して、権力の基盤への接近の機会を得ることによって、意思決定の過程から排除されていた人々が自ら力を獲得する道を拓くこととされている（Friedman, 1995, Solomon, 1976）。ここでいう「権力の基盤への接近」や「意思決定」は、ソーシャルワークによってアプローチする対象が異なり、地域の社会的状況、文化、習慣などにも影響を受ける。したがって、対象が変われば、いかなる権力にいかに関与するか、どのような意思決定に参加するかは変化する。対象者や対象地域に暮らす人々が、どのような状況になった場合にエンパワメントといえるかは異なると考えられる。本研究においては、アメリカでラテン系移民として暮らす女性のエンパワメントがペアレント・メンター事業¹⁾に参加したことによって、どのように進むかについて明かにする。

1.2 ペアレント・メンター制度とローガンスクエア・ネイバーフッド・アソシエーション（以下 LSNA²⁾ と省略）の事業

研究対象となっているペアレント・メンター事業とは、次のようなものである。

ローガンスクエア・ネイバーフッド・アソシエーションの取り組みの中でも教育事業は重要な位置づけを占めている。

ラテン系移民は 20 世紀以降の新しい移民であるが、過去の移民たちが抱えていたのと同様の問題を抱えている。言語の違いから子どもたちが学校の授業についていけないことや、退学率が高いこと、高等教育への進学率が低いことである。親世代も言語の問題から、教育の有無にかかわらず、正規の雇用や十分な賃金が支払われる職業に就くことが難しい。

ペアレント・メンター事業は、地域の公立小学校において、授業についていくことが難しい子どもたちの隣に支援者が座り授業を助ける取り組みである。ひとつの小学校に概ね 10 人組の母親グループを組織し、メンバーのうちコーディネーターがクラス担任と調整して、ペアレント・メンターを教室に派遣する。この取り組みは、1995 年、小学校の校長が、毎日子どもたちの送り迎えに来る母親たちが友人もなく家に帰るとスペイン語のテレビ番組を観て迎えの時間までをすごしていると知り、LSNA に相談を持ちかけて教室での手伝いをするようになったことがきっかけで始まった。1995 年から現在までの間に約 15,000 人のペアレント・メンターが事業に参加した。

ペアレント・メンターは、月曜から木曜日まで週 4 日間派遣され、金曜日にはペアレント・メンター

1) シカゴ市ローガンスクエア地域で、近隣地域の小学校における授業内での子どもへの学習支援活動である

2) Logan Square Neighborhood Association

自身の研修を行う。研修は、LSNA が企画した教えるスキルの向上や自己研鑽的な内容のものもあるが各小学校に配置されたコーディネーターが自分で企画するものもある。2018 年現在、ローガンスクエア地区の小学校のうち、8 校が参加している。LSNA は、正式な入国の書類の有無にかかわらずラテン系移民を支援する立場をとっている。そのため、スペイン語を母国語として話す子どもたちの学習支援と同時に、移民の母親たちが、リーダーシップを開発することや地域に参加することを重視している。それは、LSNA が行っている事業の内容から見ることができる。地域で人材を探し出し、演劇や楽器やダンスや料理やスポーツや学習会などの講師として採用し、子どもたちのアフタースクール活動のために開催するため、LSNA が力を入れている事業の一つであるが、補助金を確保し、コーディネーターも雇用している。

子どもの学習だけでなく、母親の学習にも力を入れる。多くの移民が英語を話せないことから、英語の習得を支援している。また、LSNA は母親たちと一緒に政治活動も行う。ペアレント・メンター事業や、公立学校の補助金に関する情報は、関係する母親たちと共有して、補助金の要求や教育の改善要求を行うために州議会が開かれるスプリング・フィールドにバスに乗って出かけていき、シカゴ市庁舎にプラカードを持ってデモに行くといった活動を行う。LSNA は、ペアレント・メンター派遣のための補助金の要求運動を実施してきた。最初ペアレント・メンター事業は、民間の助成財団であるアメリコープの助成によって、ペアレント・メンター 1 人 600 ドルの謝礼金や、コーディネーターの給与などを支払ってきたが、のちに、イリノイ州に対して支給要求を行って補助金を得ていた。2015 年に州知事が変わり、州は補助金を出し渋っている。このため、ペアレント・メンター事業の継続に支障が生じてきた。LSNA は、メンバーを動員してスプリング・フィールドにロビー活動に行く。

LSNA は、ペアレント・メンターを経験したことをきっかけとして、バイリンガルの教員になろうと高校や大学に入学する母親の支援するために、大学の講座を地域の小学校に持ってきて出前で授業をするように要求し、実現してきた。バイリンガル教員の養成は、現在では州の事業となっている。ペアレント・メンター経験者の中から何人ものバイリンガル教員が生まれている。この事業は、Grow Your Own Teacher（以降 GYOT と省略する）と呼ばれている。

LSNA は度々母親たちと一緒にワークショップを行うが、移民のおかれている立場や、地域にどのような課題があるか、自分自身の目標は何かなどのテーマを提供して参加者にディスカッションして学ばせる。また、LSNA は制度や支援に関する情報提供も行っている。例えば、イリノイ州には、子どもの公的健康保険制度が整備されているが、これを知らない家族も多い。LSNA には、この健康保険の普及や申し込みの仕方をスペイン語で教えるコーディネーターがいる。法的な支援を必要とする場合は弁護士や相談窓口につなげる。

本稿では、ペアレント・メンター事業に参加したことで、底辺労働や家庭に引きこもった生活をしていた移民女性たちが再びパワーを獲得する過程に着目している。

2. 研究方法

研究の第一段階では、事業参加の経緯、現在までの活動内容、生活の変化とその経緯について10人のペアレント・メンター参加者に半構造化インタビューを実施した。準備期間を含めてインタビューは2014年8月～2015年3月に実施した。対象者は、ペアレント・メンターの経験者で、コミュニティや学校などで働いている人を対象とし、最初の1名をLSNAからの紹介でインタビューし、その後はインタビューの紹介でリレー式にインタビューを行った。これを修正版グランデッド・セオリー・アプローチによって分析する(木下 2005)。分析の方法は、インタビュー調査で得た録音記録を逐語化し、文節に区切って番号をつけて個別化したうえで、これにラベルをつけて、カテゴリー化した。コーディングは、対象者ごとに、文節を区切って番号を昇順に振っている。さらに、これらをカテゴライズし、ラベリングした結果が、後に出てくる表2-1と2-2である。この研究は、エンパワメントのプロセスに着目した研究であり、エンパワメントがある程度成功していると考えられる対象者を選んでインタビューを行っている。

質問項目は、以下のとおりである。

- 1) 現在の状況
- 2) ペアレント・メンターを始めたきっかけ
- 3) ペアレント・メンターにおける体験
- 4) ペアレント・メンター体験後の変化
- 5) これからの目標

エンパワメントは、ソーシャルワーク方法論においてよく使用される概念であるが、その概念規定や定義に関しては未だ議論が成熟していない面がある。本研究では、まず、ソーシャルワークやその近隣分野におけるエンパワメント概念の構成要素を文献によって分析し、さらに、ローガンスクエア地域において実施したインタビュー調査の結果について分析し、ラテン系移民女性のエンパワメントについてそのプロセスの特徴を明らかにする。

この研究に先立ち、筆者は、＜研究ノート＞「就労を通じた女性のインテグレーションの過程に関するインタビュー記録 —ペアレント・メンター事業参加者—」(2015年/『海外事情研究』第43巻第1号)、＜研究ノート＞「ローガンスクエア近隣地域における移民女性のエンパワメント調査第一次集計結果」(2017年/『社会関係研究』第23巻)、「シカゴにおける移民女性の英語力が近隣生活におけるエンパワメントに及ぼす影響に関する研究」(2018年/『社会関係研究』第23巻)を著している。本研究においては、これらの研究から得ているデータや結果を踏まえて、結果の整合性についても検証を進める。

なお、本研究の研究倫理については2014年7月熊本学園大学研究活動適正化委員会における研究倫理審査を通過し、倫理上の問題のない研究かつ、研究方法であることを承認されている。

3. 先行研究

近年のエンパワメント研究は、ほとんどが開発途上国に関する実践家や研究者によって行われている。エンパワメントは、社会福祉だけでなく、政治、公衆衛生、開発、看護、ジェンダーなどの分野でも使われている概念である。しかし、エンパワメントを定義した論文はあまり見られない (Oxaal and Baden 1997) とされており、世界銀行が、エンパワメントに関して、3つの異なる定義を示している (World Bank 2001; Narayan 2004; Alsop, Bertelsen and Holland 2006)。ハルフォンは、国際機関が提示している女性に関して使用されているエンパワメント概念は、サービス、雇用、教育へのアクセスなどの指標に集中しており、政治的参加にほとんど焦点をあてていないと疑問を呈している (Halfon 2007)。このような評価を踏まえつつ、なお、世界銀行は、エンパワメントについて研究を蓄積していることには間違いない。そこで、開発学における蓄積を本研究に援用可能かどうかについてここで検討する。

国際開発機関にとってエンパワメントは、達成されるべき所定の状況、あるいは開発によって得られる結果を示すと考えられる。世界銀行の定義では、「エンパワメントとは、貧困層の人々の生活に影響を与える責任ある制度に参加し、交渉し、影響力を及ぼし、管理し、保有する資産と能力の拡大である。」としている (World Bank 2001)。世界銀行では2004年にエンパワメントを客観的指標として数量化して計測することを試みている (Petesch ほか、2005、Mason 2005)。この中では、経済的意思決定、家庭内での意思決定、移動の自由、夫との対等な関係性の4つのカテゴリーに基づくエンパワメントが提示されている (Narayan 2005)。

この指標を使って同じ調査を行うとラテン系の人々に期待よりも高い数値が出やすく、東アジアでは低い値が出やすい傾向にあるとしている (Petesch ほか 2005)。同じインデックスを使用しても文化や地域によって結果に差異が出ることがあり、この傾向は、エンパワメントと密接な関係にある生活満足度の平均値にも現れている (Diener and Biswas-Diener. 2005)。具体的には、地域性、民族による差異が見られ、極端な例を挙げると、ケニアのマサイ族やイヌイットのほうが、イリノイ州の看護師や学生よりも生活満足度が高い結果が出ている (Diener and Biswas-Diener. 2005)。

UNDPのGender Empowerment Measureや世界銀行が使用している家庭で消費される食料や水へのアクセスの「富」指標など、女性のエンパワメントを測定する指標や、エンパワメントを達成するために用いられた手段は、正確にはエンパワメントを構成する手段であるとする考え方もある (Agot 2008)。

このように国際開発機関では、1990年代から女性、ジェンダー、開発についての議論を始め、2000年代には貧困削減に関する議論が盛んに行われてきた。これによって、エンパワメントは、経済的自由や能力を手に入れることと直結していった。よって、最近、女性のエンパワメントに関する研究のほとんどは、開発に関連する分野で書かれている。今回調査対象にしているアメリカのラテン系移民は、メキシコ、コロンビア、アルゼンチン、プエルトリコ³⁾といった国から入国して数年、ある

3) プエルトリコ人はスペイン語を話し、ラテン系ではあるが、正確には移民ではない。アメリカの海外領土

いは、長期間が過ぎている人、移民代二世、第三世代が含まれており、また、居住する地域がイリノイ州シカゴ市という自由な市民社会であることに鑑み、この影響にも配慮する必要があるだろう。

4. 研究の結果

4.1 エンパワメントの理論的背景と構造分析

4.1.1 ソーシャルワークにおけるエンパワメント

ここでは、まず、ソーシャルワークの中でエンパワメントの概念がどのように取り入れられ、どのように扱われてきたかを整理した上で、理論構造について整理する。ソーシャルワークにおいて、地域に介入していくときのひとつの目標は、住民のエンパワメントである。

エンパワメントを最初にソーシャルワークの概念に統合したのは、サザン・カリフォルニア大学でソーシャルワークを研究していたバーバラ・ソロモンである。エンパワメントは、その概念が国際開発の中でも使われるようになったが、専門職が、イネイブラーとなって、パワーレス状態の人に力を与えると考えている点が、援助者と被援助者の間に上下関係を生じているとして、1980年代には批判の対象となった。その代わりに、被援助者自身を主体としたキャパシティ・ビルディングの概念を使用すべきという考えもある。途上国におけるエンパワメントが、批判された経緯は、先進国からやってきた開発者が先進国の論理や価値観で開発を行うことへの抵抗や反省であった。この影響を受けて、アメリカのコミュニティ開発やコミュニティ・オーガニゼーションでもキャパシティ・ビルディングの概念を多用した時期もあるが、ソーシャルワーク論の立場からコミュニティ・プラクティスを語るうでは、エンパワメントは、支援論として重要な概念である。

ソロモンは、研究者であると同時に、養子縁組のソーシャルワークからはじまり、病院や地域のコミュニティ組織の委員長を務めるなど実践にも明るい人物であった。ソロモンのいうエンパワメントとは、「力を失った状態 (powerlessness)」から再び力を得る状態を指す (Solomon 1976)。

ソロモンがエンパワメントを提唱する背景として、公民権運動がある。アメリカは、南北戦争によって、公式には奴隷制を廃止したが、南部の州では、アフリカ系アメリカ人に対する差別を終結させず、人々は差別に耐え続けていた。モンゴメリー・バス・ボイコット (Montgomery Bus Boycott) は、アフリカ系アメリカ人がアラバマ州モンゴメリで市バスに乗り込み、人種によって分離された座席に抗議したことに発端する運動であった。ボイコットの契機となったのは、アフリカ系アメリカ人の女性ローザ・パークスが白人男性に座席を譲らなかったために逮捕され罰金を科された事件であった。最高裁は、最終的にモンゴメリ市にバスにおける人種の統合を命じ、ボイコットの指導者のひとりでキリスト教の牧師であるマーティン・ルーサー・キング・ジュニアが、アメリカの公民権運動のリー

として、米国自治連邦区にあたる。主権国はアメリカであるが、自治政府による内政が認められている。しかし、アメリカ本土の大都市との経済格差により移動が多い。シカゴでは、北西部のフンボルトパーク・コミュニティ・エリアやローガンスクエアなどに多くのプエルトリコ人が暮らしている。

ダーとして浮上した。こうして、ひとつの事件は運動に発展し、1960年代は、アメリカのアフリカ系アメリカ人にとって失われた力を取り戻すための闘争の時期となった。

マルティン・ルーサー・キング・ジュニアは、人権運動の国家的指導者として、非暴力抵抗運動を率いた。キングのアプローチは、1960年代の公民権運動の象徴であった。公民権運動を扇動する草の根的な取り組みの舞台は、コミュニティであった。公民権運動で勝ち得た法的平等のもと、アフリカ系アメリカ人は、「ブラック・パワー」と「コミュニティ・コントロール」を求めた (Solomon 1976)。ソロモンは、こうした公民権運動の中で使われていたパワー、つまり力の概念をソーシャルワークに取り込んだのである。

ソロモンは、エンパワメントこそがソーシャルワークのプロセスであり、ゴールであるとしている (Solomon 1976)。ソロモンのソーシャルワークにおけるエンパワメントの概念は、マイノリティ集団に対する負の評価の結果やスティグマを付されている集団に所属していることによって生じたパワーレスな状態に対して、パワーのある状態に引き上げることであるとしている (Solomon 1976)。

ソロモンの著書“Black empowerment”においては、「エンパワメントとは、ソーシャル・ワーカーや他の専門職が、対象者とともに差別やスティグマを刻印された集団に所属することによって生じたパワーレスの状態を減じるために行う活動、およびその過程である」としている (Solomon 1976)。ソロモンは、ソーシャルワークそのものの対象として個人（文中では Client という用語を使用）をあがっているが、著書全体を捉えてみると、その所属する集団であるコミュニティ全体のエンパワメントを志向している。ソロモンの定義するエンパワメントの最終的な目標は、差別やスティグマを刻印された集団の力の回復であった。

ブラジルの貧困地域で識字教育を通じて住民のエンパワメントを行ったパウロ・フレイレは、抑圧された人々自身が、自らが抑圧され、マージナルな位置に追いやられていることに対して、批判的視点や観察能力を養い、解放の道を歩み始めるために立ち上がることをエンパワメントと考えた (Freire 1973, 1993)。フレイレは、識字教育にかかわってきた経験から、詰込み型の教育は、このような自らを解放するための能力を妨げると考えていた (Freire 1973)。フレイレは、批判的視点を養うような教育にこそ、エンパワメントの源があると考えていたのである。このフレイレの考え方は、南アメリカだけでなく、世界の実践家によって見出されていった。アメリカにおけるコミュニティ実践においても、フレイレの解放のための批判的視点が導入されていった。

ソロモンとフレイレには、貧困によって、教育をうけることや、コミュニティにおける意思決定や政治的な関与を行うことが困難な人々やコミュニティを対象として働いてきた経験からエンパワメントの概念を構築しているという共通点がある。

ジョン・フリードマンは、エンパワメントの定義に関して、力を剥奪された状態、あるいは、力（権力の基盤）へのアクセス機会がない状態であり、逆に接近の機会を得ることによって、貧しく、意思決定の過程から排除されてきた人々が自ら力を獲得する道を開くとしている (Freidman 1973)。エンパワメントのプロセスが進みパワー・バランスに変化が生じるとこれまでパワーを持たなかった集団や個人がパワーを持つようになり、これまでパワーを持っていたものを含めた社会の構造的変化が起るが、これをトランスフォーメーションと呼んでいる (久木田 1998)。

エンパワメントの概念は、1980年代には、開発分野で使用されるようになり、指標の開発が行われている。エンパワメントされた状態は、その対象がパワーレスとなった経緯、政治的、経済的、文化的な背景と密接に関係しており、どのような状態が、エンパワメントされた状態であるかは、それぞれの対象によって異なると解釈することが妥当である。1970年代のアメリカにおいてアフリカ系アメリカ人が求めたパワーは、権利、教育、コミュニティのコントロールである。権力の意味するところは多様であるが、コミュニティにおける参加のひとつのよりどころとして、これまで何かを訴えても無視されつづけ、叫べども声なき声であったのが、ひとつの意見として取り上げられるという状態、つまり意思決定への参加があげられる。ゆえに、コミュニティにおいては、住民参加が重視されてきたのである。

4.1.2 住民参加と合意形成

1960年代後半から1970年代にかけては、住民参加の概念が確立した。アメリカにおいて住民参加が政策的に導入されるようになったのは1960年代の経済機会法においてである(西尾 1975)。コミュニティ・アクション・プログラムの中において「最大限の住民参加」が規定されたことによってマイノリティグループなど貧困な地域に暮らす人々を政策的に近隣再生事業の中に参加させることがこの事業で補助金を得るための条件となった(西尾勝 1975)。かつてニューイングランドに植民地を形成した当初から学校や道路やサービスなどの開発に関して、すべてを顔が見える直接民主主義によって意思決定し自ら推進し、政府は後から足りない部分を補うという方法論が、アメリカ社会では用いられてきた。コミュニティ・アクション・プログラムに盛り込まれた住民参加の条件は、このような伝統を継承したものであったと考えられる。

また、この頃社会的には公民権運動が高揚してきており、ブラック・パワーに象徴されるように、アフリカ系アメリカ人の地域では、自分たちが地域のサービスを担いガバナンスを構築すべきであるという考え方が浸透していった。これによって、住民参加は一層重視されるようになり、以降、アメリカの貧困地域における再生事業においては、住民参加は必要不可欠な要件と考えられるようになった。

アーンシュタインは市民参加には住民の意見を取り入れない段階、形式だけの参加、住民の権利としての参加に段階があるという理論を展開し、「住民主導」「部分的な権限委譲」「官民の共同作業」「形式的な参加機会の拡大」「形式的な意見聴取」「一方的な情報提供」「不満を逸らす操作」「世論操作」という8段階があると論じている(Arnstein 1969)。アーンシュタインの住民参加理論の中では、住民に対抗している主体は合衆国政府や州政府、市政などのガバメントである。参加の度合いが低い段階では、世論操作や、不満を逸らす操作によって参加すること自体が阻止されていると考えられているが、次の段階では形式的な参加機会の拡大や、形式的な意見聴取や一方的な情報提供によって、見せかけの住民参加を行う。そしてそれ以上の段階になると、段階的に権限の委譲が行われ、最終的に住民主導となるとしている。最終段階では、住民自身が地域再生において意思決定を行い、かつ、住民のコントロールによって、地域をマネジメントするという姿が想定されている。アメリカの大都市において、コミュニティ再生が意味するところは、単なる物的再生だけでなく、同時に貧困や失業、

薬物問題、空家、犯罪の減少など地域が抱える問題を地域として解決していくことをも意味するようになってきている。このように成功を収めるためには、地域の中での民主的な合意形成とこれに基づく意思決定が行われなければならないが、住民自身がこれを運営できる力量を持たなければならない。

4.1.3 エンパワメントの構造

世界銀行が示したエンパワメントにかかわるカテゴリーとして、社会的疎外からの回復、地域社会への参加、権力への影響力、自己決定、地域社会のコントロールとマネジメントの5つがある。最近スウェーデンの国際開発機構が行った研究では、政治的な開発、社会的開発、経済的及び自然資源の開発、自己能力 (Capability) 開発の4つに集約されている (Jupp ほか 2010)。この二つのエンパワメント構造要素を比較してみると、世界銀行が示している社会的疎外からの回復と地域社会のコントロールとマネジメントは、エンパワメントの結果と考えられる。2005年に世界銀行が出したワーキングペーパーの中に、開発途上国においてエンパワメントを計測するための指標が掲載されている (Alsop & Heinsohn 2005)。その項目は、経済、政治及び権力、社会・経済的資源へのアクセス、自己開発、社会関係構築であるが、開発途上国におけるエンパワメントと、シカゴのような先進国の大都市との間では、相対的な考え方に基づくエンパワメント指標が必要となると考えられる。

4.2. インタビュー結果

10人のペアレント・メンター経験者(表1)に対して行ったインタビューの結果をグランデッド・セオリー・アプローチ修正版によって整理した。この結果から、アメリカにおいてパワーレスな状態に追いやられている女性のエンパワメントについて分析する。

表1 インタビューの対象者

	基本属性			現在の職業、役職
	出身国	スペイン語	英語	
A	メキシコ	○	△	コミュニティ・コーディネーター
B	アメリカ	×	○	コミュニティ・コーディネーター
C	メキシコ	○	△	レセプションリスト
D	エクアドル	○	△	コミュニティ・コーディネーター
E	ナイジェリア	○	△	コミュニティ・コーディネーター
F	アメリカ(移民二世)	○	△	ヘルスプロモーション
G	メキシコ	○	△	コミュニティ・コーディネーター
H	メキシコ(3歳で移民)	○	○	バイリンガル教員
I	メキシコ(7歳で移民)	○	○	コミュニティ・コーディネーター
J	メキシコ	○	×	ランチ・レディ 小学校コミュニティ・ボード会長

○＝ネイティブスピーカーと同等、△＝仕事を遂行することが可能、
×＝挨拶や簡単な会話

4.2.1 ディスエンパワメントの状況

出身国でどのような社会的地位や学歴を築いていたとしても、アメリカ社会ではその経歴はあまり影響を及ぼさなかった。「アメリカに来ればすぐに天国のような暮らしが待っていると思ったが、実際、自分の教育程度に見合った仕事にはアメリカ人が就き、移民には、重労働か単純労働しかなかった。(B4)」「メキシコでは教員として働いていた。(F1) シカゴへ来てからは、工場で8時間ロボットのよう働き夜家に帰っては泣いた。私は生活に満足していなくて、不幸せだった。(B2)」に見られるように、出身国では知的労働に従事していた者も、アメリカでは工場などで肉体労働に従事するか、あるいは専業主婦となった。成人してから、移民した者は、期待して移民したアメリカでの生活に失望し、底辺労働に従事するうち、力を奪われたディスエンパワメント状態に陥っていったという点が共通して見られる。

アメリカで生まれた2人は別の要因によって社会的疎外状況に陥った。「16歳で妊娠し、結婚して、高校を中退したが、夜、工場で働きながら高校を卒業した。しかし、工場が移転によって閉鎖されることになり失業した。(F1, 6)」「16歳で妊娠し、高校を中退して、家賃の安かったローガンスクエアに流れてきた。(B11)」のように、妊娠して高校を退学し、子どもを抱えて、工場労働者やシングルマザーになるといったディスエンパワメント状態に陥る経路も見られた。そして、「学校の校長のような立場の人とは、(それまで)話す機会がなかった。きちんとした英語を話す人と話したこともなかった。(B11, 12)」というように社会的活動やコミュニティとのかかわりや、会話を交わす人々も限られた状況に陥ってしまった状況がみられた。

4.2.2 対話による自己の再発見

ペアレント・メンターの経験において、引っ込み思案や、シャイから、人前で話ができるようになるという変化が生じたことがわかる。「私は人前で話すことが苦手で黙っていたけど、グループに参加することそのものが勉強になった。(F15)」参加者の多くは、これまで人前で発言するような経験がなかったが、トレーニングに参加してはじめてこれを経験した。ペアレント・メンターに参加すると、最初に1週間15時間の研修を受ける。研修内容は、リーダーシップ・スキル、パーソナル・ゴール、コラボレーションの3つが主な内容となっている。これらの研修は、対話形式で問いかけられ、グループで話し合うという形で行う。授業開始後は、毎週金曜日を研修日と定めており、市政、移民の権利、健康、教育、コミュニティに関する情報や、スキルアップなどのトレーニングを実施している。その過程において、グループを作ってグループ内でディスカッションさせ、その内容を発表することや、多くの参加者がいる場面で、一人ひとりが発言する機会が与えられる。移民としてアメリカにやってきて、家庭にいと集団の中で話す機会ほとんどない。「はじめシャイだったが、ここで積極的に自己表現することを学んだ。そして、はじめて人前で話すようになった。ペアレント・メンター・プログラムが成功し、自分の体験を人前で話す機会が多くなると、自分の経験が貴重なものとして扱われ、自信や自尊心が芽生えた。(B2)」というエピソードが、話すことによる効果を端的に示している。

この研修において、最も影響を与えたと思われる問いかけは、「あなたの夢は何ですか？」であっ

た。参加者は、家族でも、子どもでもなく、自分自身の夢を語り、その夢を実現するためにはどのようなステップが必要かをコミュニティ・オーガナイザーが問いかけたことで、母や、妻でなく「自己」を捉えなおす機会を得て、内面から自分を見つめなおしている。

4.2.3 第二言語の習得と仕事

インタビューの対象者のうち、3人は子どものときにアメリカに移住したか、アメリカで生まれており、英語を流暢に話すことができる。残りの6人は現在では、仕事ができるレベルの英語力を身につけている。

ペアレント・メンターは、英語が話せなくても参加することができるが、ESL (English as Second Language=第二外国語としての英語) のクラスを紹介し、英語を習得したいものは、はじめのステップとしてこのコースを受講する。インタビュー対象者のうち、6人はESLで英語を学んだ。

英語のスキルが低いと、仕事は単純労働になりやすく、自国での社会的地位が高いほどアメリカでの職業との間にギャップが生じやすい。「メキシコでは教員をしていたが、アメリカでは様々な障壁を感じている。英語はそのひとつの障壁である。(J2)」 「英語を習得して、お金の支払われる仕事に就きたい。(J8, 9)」という言葉通り、仕事に就くためには、英語を習得する必要がある。「アメリカに来ればすぐに天国のような暮らしが待っていると思ったが、実は、教育程度に見合った仕事には、アメリカ人が就き、移民には、重労働か単純労働しかなかった。(B6)」 「メキシコでは教員として働いていた。(F1)」 シカゴへ来てからは、工場で8時間ロボットのように働き夜家に帰っては泣いた。私は生活に満足していなくて、不幸せだった。(F2)」 のように自国では、知的職業についていた場合でも、アメリカに来たからといって、すぐに自由と経済水準の高い暮らしを手に入れることができなかった。そこにたどり着くまでには、いくつかの壁があるが、英語の習得は、そのひとつである。

4.2.4 権力との交渉、政治への参加

アメリカのメインストリームから疎外された人々は、権力や権力につながりのある人とは遠い状態に置かれている。「(ペアレント・メンターになる前は) 学校の校長のような立場の人とは、話す機会がなかったが、先生と話す、校長先生と夜学校に集まりたい母親のために教室の使用許可のために交渉するというステップを重ね自信が生まれた。(B11)」 「仕事をはじめ、ビジネスマンと対等に話すようになる。それまでは、きちんとした英語を話す人と話したこともなかったけれど、交渉することで自信につながっている。(B13)」 「ファンダーと対等に話ができる関係になった。同じ人間として、社会の一流の場で活躍する人たちと話せることで自信をつけた。(G23)」 に見られるように、権力あるものとの対話は、自信を生んでいる。

さらに、「スプリング・フィールドへバスで行ってロビー活動をしたことも大きな自信につながった。(D23)」 「コミュニティ・オーガナイザーのBさんが“PMの補助金のために、みんなでスプリング・フィールドの議員に電話して” というので、自分のアクセントが気になったけれど、電話してみるとみんな真剣に話を聞いてくれた。そのことが私の自信につながった。家で議員に電話をかけた

表 2-1 グラウンデッド・セオリー修正版

	ディスエンパワメントの状況	対話による自己の再発見と表出
A		1. コーディネータになってコミュニケーション能力を高めた。
B	11. 16 歳で妊娠し、高校を中退して、家賃の安かったローガンスクエアに流れてきた。	2. シャイだったが、積極的に自己表現することを学んだ。 3. はじめて人前で話をするということを経験した。 12. PM が成功し、体験を人前で話す機会が多くなって、自分の経験が貴重なものとして扱われ、自信や自尊心が芽生えた。
C	4. 英語が一言もしゃべれない移民だった。 6. 私の母は、家で家事さえやっていればいいんだよという考えで、自分もそう思っていた。	
D	3. 1989 年晩秋にシカゴに来て、言葉がわからず、寒く、暗く、落ち込んだ。 4. エクアドルでは、大学を中退した。 6. 子どもが自閉症だったので、一緒に学校へ行くようになった。	7. 私は引込み思案だったが、話せるようになった。 9. ペアレント・メンター同士では、すべての情報をシェアしあう。
E	1. グリーンカードにあたってアメリカに来た。 2. 大学でエンジニアリングの学位をとっていた。 3. アメリカでは、ナイジェリアでとった学位が何の効力も発揮しなかった。 4. アメリカに来ればすぐに天国のような暮らしが待っていると思ったが、実際、自分の教育程度に見合った仕事にはアメリカ人が着き、移民には、重労働か単純労働しかなかった。	
F	1. 16 歳で妊娠し、結婚して、高校を中退したが、夜工場働きながら、夜間に高校に通い卒業した。 6. 工場が移転し、夫婦二人とも失業した。 7. そのときに学校でチラシを配っていたので、PM のことを知った。	8. グループで話し合うとき、何か言ったら人をいやな気持ちにさせるかも黙っていたが、人と話し合ううち、いろいろな考えがあってもいいのだと思えるようになった。 14. 私は人と話すことが苦手で黙っていたけど、グループに参加することそのものが勉強になった。 15. PM になったことで情報が増え、物事をもっと理解できるようになった。16. 自分がなんと表現していいかわからないことを人が言ってくれと、ああ、そういうふうに言えばいいんだと思った。
G	1. メキシコでは学校の教員として働いていた。 2. シカゴへ来てからは、工場で 8 時間ロボットのよう働き、夜家に帰っては泣いた。私は生活に満足していなくて、不幸せだった。14. 1991～1997 年の私の人生はとても暗い。2000 年以降は信じがたいほど幸せ。	
H		
I		
J	1. メキシコからの移民、英語は初歩レベル。 2. メキシコでは、教員をしていたが、アメリカではさまざまな障壁を感じている。特に言語の問題は大きい。	2. メキシコでは、教員をしていたが、アメリカではさまざまな障壁を感じている。特に言語の問題は大きい。

PM=ペアレント・メンター

によるインタビューの分析結果（1）

第二言語の習得と会話	権力との交渉、政治への参加
1. コーディネータになってコミュニケーション能力を高めた	
	11. 学校の校長のような立場の人とは、話す機会がなかったが「先生と話す」「校長先生と夜学校に集まりたい母親のために教室の使用許可のために交渉する」というステップを重ね自信が生まれた。 13. 仕事をはじめ、ビジネスマンと対等に話すようになる。それまでは、きちんとした英語を話す人と話したことなかったけれど、交渉することで自信につながっている。
7. 英語を習い話せるようになった。	
2. テレビで英語を勉強し始めた。子どもが生まれてからは、セサミストリートで英語を勉強した。 5. はじめて英語を習ったときには、レベル3クラスに入れる程度まで独学で英語を勉強していた。	17. 小学校のアドバイザーボードのメンバーになって、より深く学校の運営とかかわるようになった。 22. 学校の先生と対等に話ができること。 23. スプリング・フィールドへバスで行ってロビー活動をしたことも大きな自信につながった。
	11. コミュニティ・オーガナイザーのBさんが「PMの補助金のために、みんなでスプリング・フィールドの議員に電話して」というので、電話した。みんな真剣に話を聞いてくれた。そのことが私の自信につながった。 12. 家で議員に電話をかけた後、「ちょっと聞いてよ、今、スプリング・フィールドに電話したのよ」と家族に叫んだ。 13. 政治的な活動をするようになると、地域のために働いているのだと感じ、より、コミュニティに対するつながりを感じるようになった。 14. 2012年からコーディネータになり、3校の研修を担当するようになった。それで、政治家や秘書に、是非PMの活動を見に来てくださいと電話した。
5. アメリカで生まれているが、母国語はスペイン語である。	18. その後は、移民のシチズンシップの問題にかかわる仕事をした。 19. イリノイ州の子ども保険に未加入の世帯のリストを学校からもらい、各家庭を回って、相談にのり、加入手続きをする仕事をしている。
10. コミュニティ・オーガナイザーの秘書としての仕事の中で、議員に電話して補助金の交付について後押ししてくれるよう交渉し、政治的活動に参加するようになった。「議員に電話なんてできない」と思ったが、やってみるとできた。 4. PMの研修で、自分の目標を聞かれ、「英語が話せるようになりたい」というと、すぐにESLの夜間のクラスに入れてくれた。	7. PMになって、ロビー活動のためにスプリング・フィールドに行くようになり、州の議員と話をし、ミーティングに参加するようになった。 23. ファンダーと対等に話ができる関係になった。同じ人間として、社会の一流の場所で活躍する人たちと話せることで、自分に自身をつけた。
1. 3歳半でアメリカに来たバイリンガル。	
1. 7歳でアメリカに来たバイリンガル。	20. 選挙権がない移民は、選挙にはいけないけれども、一人のPMが問題を理解し、選挙権のある家族や友人に伝えることができる。
2. メキシコでは、教員をしていたが、アメリカではさまざまな障壁を感じている。特に言語の問題は大きい。	6. 校長と直接交渉、スプリング・フィールドへのロビー活動などによって、政治的に目覚めさせられた。

後、“ちょっと聞いてよ、今、スプリング・フィールドに電話したのよ。”と家族に叫んだ。(E11, 12)」
「秘書としての仕事の中で、議員に電話して補助金の交付について後押ししてくれるよう交渉したり、政治的活動に参加するようになった。“議員に電話なんてできない”と思ったが、やってみるとできた。(H10)」
「選挙権がない移民は、選挙にはいけないけれども、一人のPMが問題を理解し、選挙権のある家族や友人に伝えることができる。(I11)」
「校長と直接交渉、スプリング・フィールドへのロビー活動などによって、政治的に目覚めさせられた。(J6)」
といった、政治や政策への関与が、自分たちの身近な問題である、ペアレント・メンター事業のための補助金要求を通じて行われている。社会的に疎外され、ディスパワメントされている状況では、政治への関与や政治家との対話は起こりえない。

4.2.5 地域・社会的課題の認識

ペアレント・メンター事業に参加するようになると、「地域社会の問題を認識するようになった。その結果パトロールを行うようになった。(B5)」、また学校教育に対する課題として、教室の子どもの人数が一人の教員に対して多すぎるということに気づいた (B7, C3, F9, H4)。」地域や社会的課題への認識が進んだ。

また、移民は、生活の中に自国の文化や伝統を継承するが、「私がコーディネーターをしている学校では、両親の教育水準はあまり高くない。多くのラテン系のファミリーでは、夫が保守的で妻を守るような関係がほとんどである。このため女性は自尊心が低く、専業主婦であることを家庭の中で求められている場合が多い。(J9)」という指摘があった。これに対して、「私の母は、家で家事さえやっていればいいんだよという考えで、自分もそう思っていた。しかし、ペアレント・メンター・プログラムに参加してみると、同じ移民であるMさん、Lさんが立派に働いているのをみて自分にもできるはずだという気持ちになった (C6)。」という価値観の転換を示す口述があった。

4.2.6 自己肯定感の獲得

ペアレント・メンターの経験から、「ペアレント・メンターになって、自分自身のことを内面から見つめられるようになった。(G26)」という内観の達成や、自己覚知、自己肯定感や有用感が得られている。

その具体的な契機として、研修会でのLSNAのコーディネーターから「あなたの夢はなんですか？」と問いかけられたことが複数のペアレント・メンター経験者から上げられている。そして、「妻になり、母になり、家族にすべてをささげたつもりだったが、自分の人生をもう一度生きている。(D15)」と一人の人間としての自己を回復し始めている。

これをステップに、「もっと自分に何かできるはずだ。(D12, G8)」、「今では何でもできるという気持ちだ。(B2)」、「体の中から力がわいてくる。(E3)」
「困難と思えることにもチャレンジするようになった。(D14)」という内面に力が芽生えた様子が語られている。

また、「ペアレント・メンター・プログラムによって私の中の可能性に気づかされた。(D14)」、「ペアレント・メンターとして働くようになって、自分の中のリーダーシップに気づいた。(G9)」と

いう自己有用感や自己肯定感が芽生えていった。

これらの気づきや変化は、教室で教えるという作業の中よりは、集団による話し合いや研修、コーディネーターやピア関係の対話の中で、起こっている。

教室の中では、「自分は教えるという仕事が向いていると認識した。(A7)」「自分は教えることが好きだと気づいた。(G28)」と、直接教員というキャリアに結びつく自己覚知が芽生えた。

他方、ペアレント・メンターの経験は、「ペアレント・メンター終了後は、ランチ・レディとして高校の食堂で働いている。やはり英語が話せないと自分が願っているような職業には就けない。自分にとって英語の習得は最大の鍵である。(J4, J5)」のように自分の弱点についてを気づかせるものでもあった。

4.2.7 家族、夫との関係性の変化

保守的な家族関係の伝統を持つラテン系の家族において、ペアレント・メンターに参加した女性たちの夫との関係性が変化している。「夫も、自分が目標を持ち働くことをサポートしてくれている(C14)」、「夫も自分の人生を生きはじめた私を応援してくれている。夫も今では自分を誇りに思っている。(D16, D25)」、「夫からは、幸せそうだから、もっと仕事をがんばれといわれている。(H17)」、「医者を目指して学んでいる夫とともに、自分は学校の教員を目指して学んでいる。(I3)」のように、妻の仕事や夢に対してサポートする関係性が生まれている。

4.2.8 明確化された目標

ペアレント・メンターの研修では、自己の目標設定を求められる。そして、その夢を達成するために何が必要なのか自ら考え、そのための計画を立案する。それを仲間の中で共有する。そのような過程の中で、参加者の目標が明確化されていっている。インタビューを行った一人ひとりが、目標を持っている。

5. 結論

5.1 ディスエンパワメントの経緯

ディスエンパワメントの経緯には、2つのプロセスが見出された。

移民女性が陥ったディスエンパワメントの経緯として、出身国から期待を持ってやってきたアメリカでの工場労働などの底辺労働者としての苦しい生活や差別が、彼らから希望を奪っていた。特に、出身国で教育を受け、ある程度の社会的地位があって移民してきた場合には、期待していた生活との差異に苦しむ。女性は単純労働に従事する場合は社会から、家庭の中では、保守的な夫婦関係を求める伝統にも苦しめられる。もうひとつのディスエンパワメントへのプロセスは、若年妊娠、出産である。高校生活半ばにしての十代の妊娠は、教育の中断や、学校集団からの離脱を招いている。このことは、移民だけに限らないが、特にラテン系の国々からの移民は、妊娠中絶を許さない宗教的背景や

表 2-2 グラウンデッド・セオリー修正版

	地域・社会的課題の認識	自己覚知から自己肯定感の獲得
A		7. 自分は教えるという仕事が向いているのだと認識した。
B	5. 地域社会の問題を認識するようになった。その結果パトロールを行うようになった。 7. アフタースクールプログラム、宿題のサポートなどが必要と考えた。	4. 「LSNA のコーディネータから「あなたの夢はなんですか？」ときかれてはじめて自分について考えるようになった。
C	3. 教室に行くようになって、先生は一人で子どもたちの面倒を見ることは難しいと気づいた。	8. 同じ移民である M さん、L さんが立派に働いているのを見て、母のように専業主婦でなく、自分にも何かできると強く思った。
D		8. PM を経験して、自分の力で自分自身を育て、確立していくことを知った。12. 研修のとき「あなたの夢はなんですか？」と聞かれた。子どもや学校のことでなく自分自身のことを考える体験だった。 13. PM になって、もっと自分に何かできるはずだと思った。 14. 困難と思えることにもチャレンジするようになった。 15. 妻になり、母になり、すべてささげたつもりだったが、自分の人生をもう一度生きている。
E	6. アメリカに来ればすぐに天国のような暮らしが待っていると思ったが、実は、教育程度に見合った仕事にはアメリカ人が就き、移民には重労働か、単純労働しかなかった。	16. 今は、何でもできるという気持ちだ。 17. 体の中から力がわいてくる。 18. PM によって、私の中の可能性に気づかされた。
F		7. PM になったことは私を開眼させた。それまでは、グループで話し合うときなど意見を言わずに黙っていたが、人と違う考えを持ってもいいのだと気づかされた。
G		8. ミーティングなどに参加して、発言するうち、自分にはもっと力があると確信しはじめた。 9. PM として働くようになり、グループの中にあつて、自分の中のリーダーシップに気づいた。 13. PM になって道が開け始めた。どんなチャンスも逃さないように、働いている。 26. PM になって、自分自身のことを内面から見つめられるようになった。 28. 自分は、教えることが好きだと気づいた。
H	4. 教える側として教室に入ってみると、一人の教員でできることは限られていると気づいた。 5. いかに先生が大変なのかに気づいた。	
I	9. 私がコーディネータをしている学校では、両親の教育水準はあまり高くない。多くのラテン系のファミリーでは、夫が保守的で妻を守るような関係がほとんどである。このため女性は自尊心が低く、専業主婦であることを家庭の中で求められている場合が多い。 13. 本来 2 時間である PM の仕事をもっと長くやる人たちがいる。教員一人に 20 人の子どもは多すぎる。PM が数人の子どもを教えている間に、教員は他の子どもに集中できる。 16. 移民の子どもたちがどのような境遇に置かれているのか体験を通して知っている教員がいることは重要である。	
J		4. PM 終了後は、ランチレディとして高校の食堂で働いている。やはり、英語が話せないと自分が願っているような職業には就けない。 5. 自分にとって、英語の習得は最大のカギである。

によるインタビューの分析結果（2）

家族、夫との関係性の変化	明確化された目標
3. PM に理解のない家族に対して「あなたも参加してみたら」と介入したら、協力的になった。	5. バイリンガル教員として働く目標がある。
	15. 夢は、15 エーカーの庭がある家に住み、ポーチに座って庭を眺めること。
14. 夫も、自分が目標をもち、働くことをサポートしてくれている。 15. PM の経験から、子どもをきちんとサポートし、子どもにいろいろ教えることができるという点を夫が評価している。	10. 教員になりたいという思いを明確化し、その目標に向かって、大学で学んでいる。
16. 夫も自分の人生をもう一度生き始めた私を応援してくれている。 25. 夫も今では自分を誇りに思ってくれている。	25. もっと地域のために貢献し、よいプログラムを導入したい。
	15. 将来は修士課程に行き、また教鞭をとりたい。数学を教えるとか、成人教育とか何かを教える仕事に尽きたいと思う。
	20. これから、学校に行って、移民の手助けをするパラリーガルになるか、ソーシャルワーカーになるかどちらかを考えている。もっとステップアップすることを望んでいる。
	6. 教室に入ると、教師であったことを思い出した。そして、また教壇に立ちたくなった。 18. 私の夢は、運命を切り開いてくれたモンロースクールの教員になることだ。
17. 夫からは、幸せそうだから、もっと仕事をがんばれといわれている。	7. PM として働くうちに、学校や地域のためにもっと働きたいと思うようになった。 20. 将来は、マスターコースに行って、もっと教育のスキルを高めようと思う。 21. 常にゴールを設定して、到達していくことが重要だと、PM を通じて学んだ。
3. 医者を目指して学んでいる夫と共に、自分は学校の教員を目指して学んでいる。	3. 医者を目指して学んでいる夫と共に、自分は学校の教員を目指して学んでいる。 5. 私は、妻や母であるだけでなく、自分の目標をもって生きていきたいと考えていた。PM はそのためのきっかけとなった。 21. 私は幼児教育を専門とする教員になりたい。
	8. 英語が話せるようになること。 9. 今後は収入につながるような仕事をしたい。

性に関する話題を公にするタブーを抱えているため若年で妊娠すると親に相談することが難しい。

5.2 エンパワメントへのプロセス

ディスエンパワメントされた状況から、再びパワーを獲得するために、自らの価値や力を再発見し、自己肯定感を持つための過程において3つの要素とマジックワード、そして方法論が明らかになった。

(1) 問題の集团的意識化

まず、第一に、グループワークと集団での対話の重要性である。ペアレント・メンター・プログラムに参加することによって、「人前で自分を表現し、話をする」ことができるようになり、そこで、グループでディスカッションすることを経験している。ペアレント・メンター・プログラムにおいては、金曜日を研修日として、参加者の対話やグループワークを行っている。ここでは、話すことによって自分自身の内面と向き合うことや、目標を設定すること、人の意見を聞き、共感すること、異なる意見も耳に入れるということを経験する。これらの対話や情報は、参加者に共有される。

フレイレによるブラジルの不法滞在住民の識字教育において、少人数のグループを集め、日常生活を支配するテーマを説明し、グループで検討する問題としてこれらのテーマを話し合い、対話をし、そこでの重要な問題を選択して、その問題に対処する計画を策定したという方法と共通性がある(里見 2010、Freire 1995)。このモデルの目的は、人々の意識を社会の変革に合致した状態に変化させていくことである。そして、個人が抱えている課題や地域の課題を集团的に意識化させていくというプロセスを踏んでいる。フレイレの実践で起こったことがペアレント・メンターのグループワークでも同様に起こっている。ペアレント・メンターは、グループワークにおいて様々な問題や情報を共有し、移民家族、女性、子どもたちが共有する課題を意識化していったのである。

(2) 第二言語としての英語の習得

第二に、第二言語としての英語の習得がひとつのステップになっている。移民コミュニティの内部に暮らす母親や妻である場合、英語はそれほど必要ではないかもしれない。移民同士の会話は、多くの場合母国語が使われる。しかし、経済的な自立や、社会的な地位の獲得には、アメリカ社会とつながる必要があり、このためには、英語の習得が必要である。筆者が、実施した別の研究においても、アメリカの移民女性の経済的エンパワメントには、英語能力との強い相関関係が見出されており、この結果は一致している(仁科 2018)。

(3) リテラシーとオラリティの両者の重要性

ペアレント・メンターがエンパワメントされていくプロセスの中では、単なる第二言語としての英語を覚える、仕事に役立つこと学ぶといったリテラシーだけではなく、対話や話し合いなどによって物事を共有することの重要性が見出されている。ソーシャルワーク方法論の側面から見ると、「グループによる対話」の重要性を示しているといえるだろう。このアプローチは、メンバーが必要とするサービスを開発することによって、個人だけでなくコミュニティ自体をも強化する方法であるといえる。

この方法は、コミュニティの内部において、孤立を減らし、相互の関係性を増加することによって、参加者に心理的、社会的利益をもたらすことができる。対話によって、課題や問題を共有することによる問題の意識化や集団化がエンパワメントのプロセスには重要である。つまり、移民女性のエンパワメントには、リテラシーとオラリティによる対応の両面が必要と考えられる。

（4）重要な問いかけ「あなたの夢は何ですか」

ペアレント・メンターに問いかけられた「あなたの夢は何ですか」という言葉が、自分を見つめなおすことになったという結果がほとんどのインタビューーに見られた。ディスエンパワメントの状態は、自分の夢さえも失わせている。伝統的な家族関係の中で、「自分」を失い、妻や母親として生きていた女性たちにとって、この言葉は、マジックワードとして、次のステップへの大きなねどとなっていた。そして、地域に貢献するコミュニティ・コーディネーターや、GYOT の教育課程を経て、バイリンガルの教員を目指すといったステップにつながっている。

（5）権力への接近と政治への参加という方法による自己肯定感の確立

権力への接近と政治への参加の重要性である。ディスエンパワメントされ、アメリカのメインストリームから疎外されている状態では、権力や権力につながる人との距離は遠い。ロビー活動によって政治家と対話し、デモを行って要求運動を行ううち、ディスエンパワメントされていた人々が、自信を取り戻し、自分の力を再発見するプロセスが、本研究のなかで見出された。コミュニティ・オーガナイザーは、ペアレント・メンターに関連する補助金の要求運動という参加者にとって身近な問題を取り上げて、移民女性たちを政治に接近させている。チェコウェイは、コミュニティの変化に関する6つの異なる戦略を「大衆の動員」、「ソーシャル・アクション」、「市民参加」、「パブリック・アドボカシー」、「教育」、「ローカルサービスの開発」としている (Checkoway 1995)。大衆の動員は、多数の人々を組織し、集団化することによって変化をもたらすことを目指している。このためには、何を問題として取り上げるかが重要である。多数の人々に訴える問題を選択しなければならない。

アリンスキーがウッドローンの地域組織化において、バスを連ねて人々を選挙人としての登録に向かわせ、政治的な力を教え、誇示したのとは一致する (Alinsky 1946)。当時の出来事を端的に現す一節がローズの論文の中にある。「1961 年 8 月 26 日の土曜日に 2000 人以上のウッドローンの住民が、バスを連ねてシカゴ市役所へ投票の登録に出かけた。そのデモはコミュニティの士気を高め、見ていた人に言わせると、ウッドローンのもっとも発言権のない人さへもが、自分は参加しているという気持ちを持ちを味わった (Rose 1964)。」アリンスキーは、ウッドローンの人々を組織的に市政へ参加させることで強く引きつけ、政治に参加することによって力を発揮できることを教え、エンパワメント、すなわち一人の有権者としての重要性に気づかせることに成功している。

ソーシャル・アクションの目標は、人々の生活を向上させ、自らの力を認識させ、地域社会の既存の権力関係を変えるために、コミュニティレベルで強力な組織を構築することである。これは、Rothman によって定義された社会行動モデルと、ハンナとロビンソンによって示された直接行動モデルの考え方との共通性がある。Hanna & Robinson は、「コミュニティ・エンパワメント」の 3

つの基本モデルを「伝統的変革モデル」、「直接行動モデル」「変革モデル」のように規定している (Hanna & Robinson 1994)。

伝統的な社会変化モデルは、「伝統的な」選挙による政治によって行われる変化に基づいているものである。つまり、何らかの要求運動を実現するための手段として、政治家が手を貸すためには選挙で当選しなければならない。したがって、投票行動や当該候補者が議会での発言権を得るような状況になることが不可欠である。しかし、Hanna & Robinson は、実際には、利益団体政治と政治的リベラリズムは、米国の疎外化された社会集団への利益をほとんどもたらさないと断じている (Hanna & Robinson 1994)。少数民族や女性の選挙区への参加が増加することは、人種差別や性差別の減少に向けた積極的なステップであるが、選挙によって政治が多くの人々に日常生活の変化をもたらす自らの力を持たせるわけではないと主張している (Hanna & Robinson 1994)。

ローガンスクエアのペアレント・メンターも政治にロビー活動や議員へのアプローチによって、具体的に何らかの生活の変化を手に入れたわけではないが、政治に参加することによって劇的な変化は起こらないにせよ、政治活動に参加することこそが、自己肯定感につながることを本研究は示している。

(6) まとめ

最後に、Hanna & Robinson の理論を借りて本研究の結果を整理し、かつ、今後の研究課題を述べる。Hanna & Robinson は、社会変革モデルは、民主主義の原則を厳格に遵守することを要求する学習モデルに基づいている (Hanna & Robinson 1994)。それは、個人指向の学習、個人間の結びつき、個人的な抑圧と社会的、構造的抑圧を結びつけること、グループ意識、意思決定、社会的行為に対する集団的アプローチを強調している小グループオリエンテーションによって特徴付けられる (Hanna & Robinson 1994)。LSNA が行っている金曜日の研修は、社会行動のために意識を高めるプロセスと考えられるのである。LSNA が設けている研修で使われるグループディスカッションの中で行われる問題認識へのアプローチや、自己の目標の設定、内観への導きへのきっかけとなっていることと一致している。また、LSNA のコミュニティ・オーガナイザーは、「あなたの夢はなんですか」という問いかけを見つけたことによって、女性たちをひとりの人間として目覚めさせることに成功している。しかし、なぜ、この問いかけにこのような力があつたのかは、この研究の中では解明できていない。この言葉の持つ力についてはもう少し具体的な研究の余地がある。

スプリング・フィールドにロビー活動に行くような直接行動モデルは、積極的な抵抗や既存の条件に対する抗議であるが、公民権や反戦運動のような広範な国家的動向の中で、人々は一時的な大衆動員に参加する可能性がある、あるいは、地域的な問題に焦点を当てた小規模な行動をする可能性はある (Hanna & Robinson 1994) といっている。Hanna & Robinson は、直接的行動に関してあまり大きな成果を期待していないようなのであるが、ペアレント・メンターは、政治や権力に接近して行くことによって自己肯定感を獲得したのであった。

こうして、社会の中でエンパワメントを獲得した女性たちは、家庭の中でも、夫との関係性が変化し、自分が認知され、大切に扱われるようになったことを自覚するようになっている。逆のパターン

して、社会的にエンパワメントされた妻と保守的な夫の間に不協和音が生じるという構図が容易に描けるが、これについては本研究の中では見出されなかった。

最後に、この研究を通じて、エンパワメントは、単一の絶対的指標によって計測することは難しく、ディスエンパワメントされた経緯や、その人々が暮らす文化的、社会経済的環境によって異なる相対的エンパワメントの指標や目標を設定することが妥当と考えられるケースが存在することが明らかになった。したがって、本研究による知見は、ひとつの地域におけるひとつの移民グループを対象としたものであり、方法論として定義するには、さらに研究を重ねる必要がある。これについては、今後の研究蓄積の中で、明らかにしていくことにする。

本研究は、JSPS 科研費 26380763 による助成を受けたものです。ここに厚く感謝を申し上げます。

引用文献

- Agot Kawango. (2008). *Women, Culture and HIV/AIDS in Sub-Saharan Africa: What Does the Empowerment Discourse Leave Out?*, In *Global Empowerment of Women*, edited by Carolyn M. Elliott, 287–302. Routledge: New York.
- Arnstein, R. S. (1969). *A Ladder of Citizen Participation*. *Journal of the American Institute of Planners*, 35(4), 216–224.
- Checkoway, B. (1995). *Six Strategies of Community Change*. *Community Development Journal* 30:1, P.2–20.
- Diener and Biswas-Diener. (2005). Psychological Empowerment and Subjective Well-Being. *Measuring Empowerment Cross-Disiplinary Perspective*, 125–140.
- Freire, P. (1973). *Pedagogia do Oprimido*. *Paz e Terra*=三砂ちづる訳、パウロ・フレイレ(2011)『新訳 抑圧者の教育学』亜紀書房.
- Friedman, J. (1995). *EMPOWERMENT The Politics of Alternative Development*. Hoboken: John Wiley & Sons.
- Halfon, S. (2007). *The Cairo Consensus: Demographic Surveys, Women's Empowerment, and Regime Change in Population Policy*. Lanham, MD: Lexington Books.
- Hanna, & Robinson (1994). *Strategies for Community Empowerment*. Lewiston, NY: Edwin Mellen Press.
- Heinsohn, & Alsop (2005). *Measuring Empowerment in Practice: Structuring Analysis and Framing Indicators*. World Bank.
- Hong, S. (2011). *A Cord of Three Stands: Anew Approach to Pearent Engagement in Schools*. Cambridge: Harvard Education Press.
- Jupp, Soel, I. A., and Barahona, C. D. (2010). *Measuring Empowerment? Ask Them Quantifying qualitative outcomes from people's own analysis*. Stockholm, Sweden: Sida.
- Mason, C. O. (2005). *Measuring Women's Empowerment: Learning from Cross-National Research*. *Mesuring Empowerment*, p.89–102.
- Narayan, D. (2005). *Measuring Empowerment*. Washington, DC: The World Bank.
- Oxaaland, S. B. (1997). *Gender and Empowerment: Definitions, Approaches and Implications for Policy*. UK: Bridge: Institute of Development Studies.

- Petes, S. C., and Walton M. P. (2005). *Evaluating Empowerment A Framework with Cases. MEASURING Empowerment Cross Desprinary Perspective*, p.39-67.
- Rose, C. S. (1964). *Saul Alinsky and His Critics. Chiristianity and Crisis*, Vol.24, No.13.
- Solomon, B. B. (1976). *Black Empowerment Social Work in Oppressed Community*. New York: Colombia University Press.
- Warren, M. R. (1995). *Dry Nones Rattling: Community Building to Revitalize Democracy*. Prinston: Prinston University Press.
- 木下 康. (2005). 『分野別実践編 グラウンデッド・セオリー・アプローチ』. 弘文堂.
- 久木田純. (1998). 「エンパワメントとは何か」. 現代のエスプリ No.376, p.44-61.
- 里見 実. (2010). 『パウロ・フレイレ抑圧者の教育学を読む』. 太郎次郎社エディタス.
- 西尾 勝. (1975). 『権力と参加』. 東京都: 東京大学出版会.
- 仁科伸子. (2018). シカゴにおける移民女性の英語力が近隣生活におけるエンパワメントに及ぼす影響に関する研究. 社会関係研究第 23 巻第 2 号, p.51-72.